別紙２

# 審査の結果の要旨

論文提出者氏名　戸田博之

戸田博之氏の博士学位請求論文『国際ビジネスにおける実効的コミュニケーションを成立させる能力モデルの構築-効果的で適切な英文ビジネスＥメールライティングに注目して-』は近年、国際ビジネスの現場において重要なコミュニケーション手段となった電子メール（Ｅメール）に着目して、優れた英文ビジネスＥメールの構成要素とその諸要素の相互関係を解明した研究である。この研究で得た知見は、ビジネスライティング教育の実践だけではなく、企業での人事評価や採用プロセスなどにも応用できる。

この論文は、８章の本文とインタビューデータを載せた別冊（Appendix）からなる。

第１章は、英語が事実上の国際共通語となった現代において、本研究の最終目的である英文ビジネスＥメールの優れた書き手育成の重要性を説明する。

第２章は、研究の背景を説明する。戸田氏が 2014 年ごろ、企業人にビジネス英語を教えたとき、通常の英語力テストで低い点数を取った受講生は実際のビジネス現場で有効になりそうな英文 E メールが書けるケースがあった一方、高いテストスコアを取った受講生は良いメールが書けないケースがあった。従来の英語教育論で説明できないその「逆転現象」の解明がこの研究のきっかけとなった。E メールはビジネスにおいて重要な通信手段であり、英語は国際ビジネスの共通語であり、そして日本において E メールライティング教育が不足しているという理由で、英語で効果的で適切なビジネスＥメールを書く能力の解明が必要であると主張する。

第３章は、関連分野における先行研究を紹介する。ライティングジャンルやコミュニケーション能力などに関する言語学研究を詳しく紹介してから、ビジネス分野で提案されてきた能力モデルを説明する。両分野をまたぐ英文ビジネス E メールライティング能力を解明するため、戸田氏は次のリサーチクエスチョンを立てる：「効果的で適切な英文ビジネス E メールを書ける非英語母語話者にはどのような能力が求められるか?」「それら能力は、相互にどのように関わり合っているか?」

「国際ビジネスに携わる非英語母語話者に求められる英文ビジネス E メールライティング能力の概念モデルはどのようなものか?」

第４章は、研究手法とデータ収集を説明する。実際のビジネス現場で交信された E メールは研究のために入手できないので、戸田氏はビジネスパーソンに書かれた 15 通の E メールサンプルを、別の 15 人のビジネスプロフェッショナルに評価させた。そして、各評価者にはその評価の理由について詳しく聞き取りした。インタビューデータの分析には川喜田二郎が考案した「KJ 法」に基づいて、上野千鶴子に開発された「うえの式質的分析法」を利用した。

第５章では、リサーチクエスチョンで提示された適切な英文ビジネスＥメールライティング能力の抽出、それらの能力の相互関係、そしてそれらの能力の概念モデルの構築を詳しく説明する。下記の図に示すように、得られたモデルは「言語コンピテンシー」「方略コンピテンシー」「価値観的コンピテンシー」を軸に構成される。

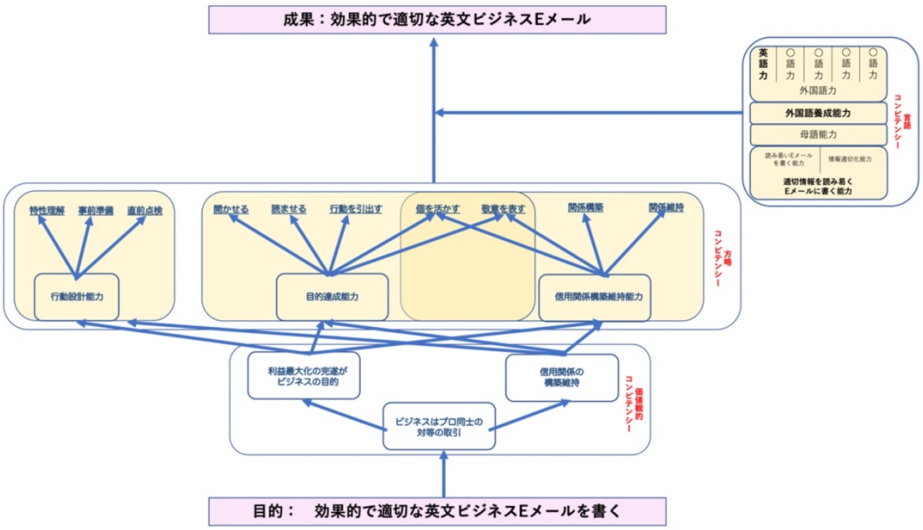


図　効果的で適切な英文ビジネス E メールのライティングモデル

第６章では、構築されたモデルの説明能力を検証する。まず、第４章の実験で高く評価された E メールサンプル３通と低く評価された E メールサンプル３通の特徴を、上のモデルで説明してみた。同様に、モデル構築に関与していなかった６通の E メールサンプルとその執筆者である６名のビジネスプロフェッショナルのコメントにもモデルを当ててみた。結果として、効果的で適切な英文ビジネス E メール

の特徴は構築されたモデルで説明できるとわかった。比較対象として、既存の英文ビジネス E メールライティング指南書５冊も分析した。その結果、構築されたモデルに新規性があり、それをビジネスライティング教育に貢献できると確認した。

第７章では、本論文の研究的意義と教育的意義を論じる。構築されたモデルにある「言語コンピテンシー」は言語学などの先行研究との共通点が多いが、「方略コンピテンシー」と「価値観的コンピテンシー」の解明は新しい貢献であると主張する。また、言語研究とビジネス研究を融合した点、他領域への応用性がある点にも、本論文に研究的貢献があると説明する。教育的意義については、英文ビジネス E メールの書き方を教える人には、英語や英語教育に関する専門知識だけではなくビジネス現場で獲得される倫理観やビジネス感覚も重要であると主張する。また、この研究で明確になった価値観的コンピテンシーモデルは、企業の人事評価や採用プロセスへ適用できると提案する。

最後の第８章では本論文の結論と残された課題について述べる。

戸田博之氏の博士号学位請求論文『国際ビジネスにおける実効的コミュニケーションを成立させる能力モデルの構築-効果的で適切な英文ビジネス E メールライティングに注目して-』の公開審査は、2022 年 1 月 27 日 9:00 よりオンラインで行われた。審査員は言語情報科学専攻から加藤恒昭教授、宇佐美洋教授、主査トム・ガリーの３名、加えて芳川恒志本学公共政策学教育部特任教授、近藤安月子本学名誉教授の２名が審査に当たった。

戸田氏はこの論文で、国際ビジネスにおける英文ビジネスＥメールの構成要素を詳細に分析し、それを基に、その E メールの作成能力モデルを構築する。本審査では、この研究の新規性と貢献が以下のように高く評価された。まず、英語とビジネスＥメールの両領域に着目することで、Ｅメール作成というタスクの目的からそのメールに使われる英語表現まで、また E メール作成プロセスに影響する価値観から具体的な作成方略まで、一貫したモデルを得たことには大きな意義がある。このモデルは、従来の言語学的なアプローチでカバーできなかった内容であり、英語教育やビジネス分野への貢献も大きい。方法論の面でも、大量のデータの詳細な分析や構築したモデルの検証では研究の厚みが増している。この論文の具体性と抽象性の折り合い、インタビューデータの効果的な活用、行き届いた議論も高く評価された。また、実際のビジネスコミュニケーションにおいて重要な役割を果たす E メールが

研究対象となっていることが、大学と社会を繋ぐ意味で重要な意義を持つとのコメントもあった。

とはいえ、この論文に改善の余地がないわけではない。例えば、「能力」という語が従来の言語学研究におけるよりやや広い意味で使われており、その定義についてより詳細な説明が望ましい。具体的には、「能力」の構成要素として「価値観的能力」という概念が重視されているが、「価値観」を「能力」に含める場合、「能力」はどのように定義されるのかについて、さらに精密な議論が必要である。また「価値観的能力」の内容や、能力の他の構成要素との相互関係についても説明されることが望ましい。同様に、構築された能力モデルの構成要素である「言語コンピテンシー」、さらにその下位分類である「英語能力」などについてもより具体的な説明が必要である。

方法論については、データ分析が精密に行なわれているのと比較すれば、能力モデルの構築には恣意的に見える面がある。また、本研究で構築されたモデルは教育やビジネスの現場に応用できるようだが、著者が独自に考案したモデル構築プロセス自体がどのように他の問題の解明に応用できるかについては十分に説明されていない。

しかし、これらの指摘は、本研究の新規性と学術的貢献を否定するようなものではなく、今後の研究に活かしていくことへの期待を示すものである。

以上のことから、本論文は戸田博之氏に博士（学術）の学位を付与するにふさわしいものであると、審査員全員一致で合意に達した。